

時間学公開学術シンポジウム 2025

『陰陽道と時間』

現代の日本社会では1年は12ヶ月で365日(4年に約1回の閏年は366日)、1日は24時間、1時間は60分、1分は60秒と決まっています。またその時間を厳守することがさまざまな場面で要求されています。電車の到着が1分遅れると、「お急ぎのところを遅れまして誠に申し訳ございませんでした」と車内アナウンスが流れ、試験監督が終了をうっかり20秒早めたら試験がやり直しとなることもあります。時間に地球の自転や公転のような天文学的根拠、体内時計のような生物学的根拠がないわけではありません。しかし1日=24時間のような時間の制度は、人為的な文化であり、今日のわれわれは自らが生み出した時間の制度に縛られているということが出来ます。

一方、現代日本の時間制度は近代になって欧米から導入したもので、江戸時代以前は354~355日の平年と383~384日の年があり、後者には閏月があって1年は13ヶ月でした。また1日=12辰刻、1辰刻=4刻(4点)、1辰刻は定時法では1日を12等分したのですが、季節ごとに長さが変わる昼時間・夜時間をそれぞれ等分した不定時法もありました。これらの起源は中国にあり、昼と夜、季節の繰り返ししか知らなかった日本列島の人々(「倭人」)は、主に朝鮮半島を経て入ってきた中国の時間制度を受容することで、細やかな時間感覚や時間意識を身につけていきました。

かつての日本では占い師を「陰陽師」とよび、彼らの術法は陰陽道とよばれました。古代以来、暦を作り、漏刻(=水時計)で時刻を管理したのは陰陽師や彼らが属する陰陽寮でした。陰陽師は日付や時刻に基づいて人々のために吉凶を占い、これによって日本人は時間を意識するようになったと言えます。このシンポジウムでは陰陽道がどのように日本人の時間意識に影響を与えたのかを明らかにしたいと思います。(細井浩志)